

企画総務委員会 送付3-18

沖縄戦で犠牲になられた方々の遺骨を
埋め立てに絶対に使用しないことを求める陳情書

受付年月日 令和3年9月29日

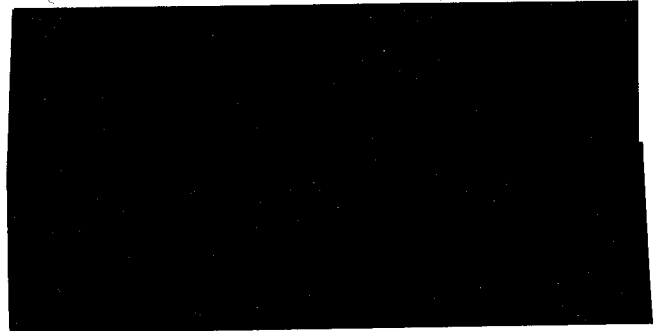
陳情者 提出者 1名

2021年9月29日

沖縄戦で犠牲になられた方々の遺骨を
埋め立てに絶対に使用しないことを求める陳情書

千代田区議会議長

桜井 ただし 殿



1. 陳情の主旨

- (1) 戦争犠牲者の生きた証としての遺骨が埋まっている土砂を軍事基地の建設のために利用することは、死者に対する冒とくであり、看過できない。直ちに計画を撤回することを求める。
- (2) 日本政府は、一日も無駄にせず、沖縄は言うに及ばずアジア太平洋戦争で失ったすべての人の命を弔い、遺骨収集を実施すること。

千代田区議会は、以上の陳情主旨を採択し、政府および国会に意見書を提出することを強く希求します。

2. 陳情の理由

- (1) 私は、親子三代にわたって靖国神社のそばで生まれ、育ちました。

神社の向かいで写真館を営んでいた父は、私に、靖国神社の「靖」をとつ



て「 」と命名しました。

1945年、日本にアジア太平洋戦争の敗戦が色濃く迫る中、東京は3月10日下町地域、5月25日山の手地域がアメリカによる空襲を受け、九段地区も焼け野原となりました。靖国神社の境内を、水を入れたバケツを抱え、祖母と弟と三人で逃げまどった記憶は未だに鮮明です。

- (2) 戦況が厳しさを増すに連れ、まだ幼さの残る紅顔の少年が靖国神社に「最後の」参拝をし、その帰途に、家族とともに記念写真を写しに立ち寄ったのが父の写真館でした。

私のまぶたには、今でもその少年達の面影が焼き付いています。

そして、私自身の叔父も、たったの赤紙1枚で、召集されていきました。

叔父は、築地にあった魚河岸の、中でも代表的なマグロ問屋で働く、曲がったことが大嫌いな、いつでも威勢のいい青年で、私は大好きでした。

召集が迫る中、その叔父と、「最後の」思い出作りに、群馬の伊香保温泉に行き、配給された貴重なお砂糖をつけて一緒にトマトを食べた光景…私の脳裏に焼き付いているその光景を、今でも涙なしに思い出さない日はありません。

召集後、まだ赤羽駐屯地にいた叔父に、叔父の母である私の祖母と一緒に会いに行きました。そのとき外地に向かう直前だった叔父。そして、二度と、叔父の元気な姿に相まみえることはありませんでした。

叔父は、理不尽な上官から部下をかばい、上官の怒りを買って最前線に送られたのです。小さな木箱の中にあった、たった数文字、〇〇〇の霊と書かれた小さな紙切れ一枚が、叔父の遺骨とされていました。縁側でその

小さな木箱を抱きかかえ、庭に向かって正座していた祖母の背中が小刻みに震えていた姿…今でも涙がこみ上げます。

パプアニューギニアなどにも、叔父と同じように、装備はおろか食べるものもなく戦死した200万とも300万とも言われる若者達の遺骨が未だに放置され続けています。戦後70年余りが過ぎ、厚労省は、収集した遺骨についてDNA鑑定をすると発表しました。しかし、時限立法の期限が2024年に迫る中、まずは遺骨を収集することが先決であり、本末転倒と言わざるを得ません。

- (3) 今、政府は、米軍のための空港づくりに、沖縄戦の遺骨交じりの土砂を海に投入して埋め立てようと躍起になっています。日本で唯一米軍が上陸し、地元住民の多くが、集団自決も含め亡くなられた土地、遺骨が風化により土と一体となっている土地の土砂を埋め立てに使うということは、亡くなられた方達の遺体の上を米軍機が何回も蹂躪していくことにほかならず、鎮魂とは正反対の行為です。戦争につながる沖縄の基地建設の埋め立てに遺骨土砂を使うことは、再び沖縄の人々を侮辱することにつながります。愛国を標榜した一強総理と権謀術数にだけ長けた鉄壁官房長官が8年も君臨して、実際にやっていることはこれであり、まるで沖縄の方を同じ日本人とみていないようです。

- (4) 沖縄は日本の敗戦によって一部のものを除き一貫して棄民政策がとられ、在日米軍基地の70%が現在も押しつけられています。(なぜなのか政府からは納得のいく説明は一切なされません。)

沖縄だけに負担を押しつけてのほほんと暮らしている私達にも責任が

あります。ですから、沖縄の痛みを自分の痛みとして感じる共感力を持ち、沖縄の現状を変えるように遠くからも声を上げなければなりません。他人事ではないのです。私にとっては叔父の無念の死の延長線上に沖縄が存在するのです。

- (5) 付け加えるならば、靖国神社には英霊として多くの兵士が祀られているとのことですが、現実の戦火を顧みることなく、若者達の命を次々と奪っていった司令官も合祀されています。命令され、いやも応もなく召集され、最前線に送られていった若者達と、命令を下した当事者達を合祀することは、私には理解し難く、戦死者達も納得いかないでしょう。

防衛省、つまり戦争を聖戦と称し多くの国民を駆り立てていった国は、戦犯と称する一部の軍人にだけ責任を取らせ、国家としてはどのような責任を取ったというのでしょうか？本来すべての国民に平等に取られるべき国の責任は、取られていません。その責任の一端を申し上げるなら、赤紙一枚で召集された多くの国民には遺族年金は支給されていません。年金と称する10万円ほどのわずかな弔慰金が遺族に支給されただけです。職業軍人である将校の妻には年間700万円の年金が支給されていたのをご存じでしょうか。現在区庁舎のはす向かいに高層ビル化中の九段会館（元軍人会館）は、職業軍人の子や孫が既得権で運営に携わり、当初は年間10億円もの補助金が投入されて安定した生活を営んでいると聞いています。このように格差化された国の戦争責任も問われなければなりません。

戦争は悲惨です。親子、家族の絆もいやおうなく断ち切られます。自分の目を見たこともなく、分からないというなら、世界に目を向けてみてく

ださい。20年にわたったアフガン戦争で、アメリカは何を得、それに賛同した国々も含めて現在何を確保したのでしょうか。何ももたらすことなく多くの人々の犠牲しか生まなかつたではありませんか。

靖国神社を擁する千代田区の、区議会議員の皆様方をお願いします。真の鎮魂とは何かを真摯に考えてください。戦争につながり悲劇を再現しないようにする懸命な努力をここに求めます。